

与謝野晶子 訳

源氏物語

野分卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

野分

紫式部

與謝野晶子訳

けざやかにめでたき人ぞ在^いましたる野
分^あが開^あくる絵巻のおくに
(晶子)

中宮^{ちゆうぐう}のお住居^{すまい}の庭へ植えられた秋草は、今年^{こと}はことさら種類^{しゆゑい}が多くて、その中へ風流^{ふうりゆう}な黒木、赤木のませ垣^{がき}が所々に結^ゆわれ、朝露夕露の置き渡^{わたり}すころの優美^{ゆうゑい}な野の景色^{けしき}を見ては、春の山も忘れるほどにおもしろかった。春秋の優劣を論じる人は昔から秋をよいとするほうの数が多いのであったが、六条院の春の庭のながめに説を変えた人々はまたこのごろでは秋の讚美^{さんび}者^{もの}になっていた、世の中というもののように。

中宮はこれにお心が惹^ひかれてずっと御実家生活を続けておいでになるのであるが、音楽の会の催しがあつてよいわけではあつても、八月は父君の前皇太子の御忌月^{おんきづき}であつた

から、それにはばかつてお暮らしになるうちにますます草の花は盛りになった。今年の野分の風は例年よりも強い勢いで空の色も変わるほどに吹き出した。草花のしおれるのを見てはそれほど自然に對する愛のあるのでもない浅はかな人さえも心が痛むのであるから、まして露の吹き散らされて無慘に乱れていく秋草を御覧になる宮は御病氣にもおなりにならぬかと思われるほどの御心配をあそばされた。おおうばかりの袖というものは春の桜によりも實際は秋空の前に必要なものかと思われた。日が暮れてゆくにしたがつてしいたげられる草木の影は見えずに、風の音ばかりのつにつてくるのも恐ろしかったが、格子なども皆おろしてしまつたので宮はただ草の花を哀れに思いになるよりほかしかたもおありにならなかつた。

南の御殿のほうも前の庭を修理させた直後であつたから、この野分にもとあらの小萩が奔放に枝を振り乱すのを傍観しているよりほかはなかつた。枝が折られて露の宿ともなれないふうの秋草を女王は縁の近くに出てながめていた。源氏は小姫君の所にいたころであつたが、中將が来て東の渡殿の衝立の上から妻戸の開いた中を何心もなく見ると女房がおおぜいいた。中將は立ちどまつて音をさせぬようにしてのぞいていた。屏風なども風のはげしいために皆畳み寄せてあつたから、ずっと先のほうもよく見えるのであ

るが、その縁付きの座敷にいる一女性が中将の目にはいった。女房たちと混同して見える姿ではない。気高くてきれいで、さつと匂いのおの立つ気がして、春の曙の霞の中から美しい樺桜の咲き乱れたのを見いだしたような気がした。夢中になってながめる者の顔にまで愛嬌が反映するほどである。かつて見たことのない麗人である。御簾の吹き上げられるのを、女房たちがおさえ歩くのを見ながら、どうしたのかその人が笑った。非常に美しかった。草花に同情して奥へもはいらずに紫の女王がいたのである。女房もきれいな人ばかりがいるようであつても、そんなほうへは目が移らない。父の大臣が自分に接近する機会を与えないのは、こんなふうな男性が見ては平静でありえなくなる美貌の継母と自分を、聡明な父は隔離するようにして親しませなかつたのであつたと思うと、中将は自身の隙見の罪が恐ろしくなつて、立ち去ろうとする時に、源氏は西側の襖子をあけて夫人の居間へはいつて来た。

「いやな日だ。あわただしい風だね、格子を皆おろしてしまふがよい、男の用人がこの辺にもいるだろうから、用心をしなければ」

と源氏が言っているのを聞いて、中将はまた元の場所へ寄つてのぞいた。女王は何かものを言っていて源氏も微笑しながらその顔を見ていた。親という気がせぬほど源氏は

若くきれいで、美しい男の盛りのように見えた。女の美もまた完成の域に達した時であるろうと、身にしむほどに中将は思ったが、この東側の格子も風に吹き散らされて、立っている所が中から見えそうになったのに恐れて身を退けてしまった。そして今来たように咳払いなどをしながら南の縁のほうへ歩いて出た。

「だから私が言ったように不用心だったのだ」

こう言った源氏がはじめて東の妻戸のあいていたことを見つけた。長い年月の間こうした機会がとらえられなかったのであるが、風は巖も動かすという言葉葉に真理がある、慎み深い貴女も風のために端へ出ておられて、自分に珍しい喜びを与えたのであると中将は思ったのであった。家司たちが出て来て、

「たいへんな風力でございます。北東から来るのでございますから、こちらはいくぶんよろしいわけでございます。馬場殿と南の釣殿などは危険に思われます」

などと主人に報告して、下人にはいろいろな命令を下していた。

「中将はどこから来たか」

「三条の宮にいたのでございますが、風が強くなりそうだと人が申すものですから、心配でこちらへ出て参りました。あちらではお一方きりなのですから心細そうになさいま

して、風の音なども若い子のように恐ろしがっていられますからお氣の毒に存じまして、またあちらへ参ろうと思います」

と中将は言つた。

「ほんとうにそうだ。早く行くがいいね。年がいつて若い子になるということは不思議なようにでも実は皆そうなのだね」

と源氏は大宮に御同情していた。

騒がしい天氣でございますから、いかがとお案じしておりますが、この朝臣^{あそん}がお付きしておりますことで安心してお伺いはいたしません。

という挨拶^{あいさつ}を言つてた。途中も吹きまくる風があつて侘^{わび}しいのであつたが、まじめな公子であつたから、三条の宮の祖母君と、六条院の父君への御機嫌^{きげん}伺いを欠くことはなくて、宮中の御謹慎日などで、御所から外へ出られぬ時以外は、役所の用の多い時にも臨時の御用の忙しい時にも、最初に六条院の父君の前へ出て、三条の宮から御所へ出勤することを規則正しくしている人で、こんな悪天候の中へ身を呈するようなお見舞いなども苦勞とせずにした。宮様は中将が来たので力を得たようにお喜びになった。

「年寄りの私がまだこれまで経験しないほどの野分ですよ」

とふるえておいでになった。大木の枝の折れる音などもすごかった。家々の瓦の飛ぶ中を来たのは冒険であつたとも宮は言つておいでになった。はなやかな御生活をあそばされたことも皆過去のことになって、この人一人をたよりにしておいでの御現状を拝見しては無常も感ぜられるのである。今でも世間から受けておいでになる尊敬が薄らいだわけではないが、かえつてお一人子の内大臣のとの態度にあたかさの欠けたところがあつた。

夜通し吹き続ける風に眠りえない中将は、物哀れな気持ちになつていた。今日は恋人のことが思われずに、風の中でした隙見^{すきみ}ではじめて知るを得た継母の女王の面影が忘れないのであつた。これはどうしたことか、だいそれた罪を心で犯すことになるのではないかと思つて反省しようとしてとめるのであつたが、また同じ幻が目に見えた。過去にも未来にもないような美貌^{びぼう}の方である、あれほどの夫人のおられる中へ東の夫人が混じつておられるなどということは想像もできないことである。東の夫人がかわいそうであるとも中将は思つた。父の大臣のりっぱな性格がそれによつて証明された気もされる。まじめな中将は紫の女王を恋の対象として考えるようなことはしないのであるが、自分もああした妻がほしい、短い人生もああした人といつしよにいれば長生きができる

であろうなどと思い続けていた。

明け方に風が少し湿気を帯びた重い音になって村雨風な雨になった。

「六条院では離れた建築物が皆倒れそうでございます」

などと侍が報じた。風が揉み抜いている間、広い六条院は大臣の住居辺はおおぜいの人が詰めているであろうが、東の町などは人少なで花散里夫人は心細く思ったことであろうと中将は驚いて、まだほのぼの白むころに三条の宮から訪ねに出かけた。横雨が冷ややかに車へ吹き込んで来て、空の色もすごい道を行きながらも中将は、魂が何となく身に添わぬ気がした。これはどうしたこと、また自分には物思いが一つふえることになったのかと慄然とした。これほどあるまじいことはない、自分は狂気したのかともいろいろに苦しんで六条院へ着いた中将は、すぐに東の夫人を見舞いに行った。非常におびえていた花散里をいろいろと慰めてから、家司を呼んで損ねた所々の修繕を命じて、それから南の町へ行った。まだ格子は上げられずに人も起きていなかったもので、中将は源氏の寝室の前にあたる高欄によりかかって庭をながめていた。風のあとの築山の木が被害を受けて枝などもたくさん折れていた。草むらの乱れたことはむろんで、檜皮とか瓦とかが飛び散り、立部とか透垣とかが無数に倒れていた。わずかだけさした日光に恨

み顔な草の露がきらきらと光っていた。空はすごく曇って、霧におおわれているのである。こんな景色けしきに対していて中将は何ということなしに涙のこぼれるのを押し込むように拭ふいて咳せき払いをしてみた。

「中将が来ているらしい。まだ早いだろうに」

と言つて源氏は起き出すのであった。何か夫人が言っているらしいが、その声は聞こえないで源氏の笑うのが聞こえた。

「昔もあなたに経験させたことのない夜明けの別れを、今はじめて知つて寂しいでしょう」

と言っているのが感じよく聞こえた。女王の言葉は聞こえないのであるが、一方の言葉から推して、こうした戯れを言い合う今も緊張した間柄であることが中将にわかった。格子を源氏が手ずからあけるのを見て、あまり近くいることを遠慮して、中将は少し後へ退いた。

「どうだったか、昨晚伺ったことで宮様はお喜びになったかね」

「そうでございました。何でもないことにもお泣きになりますからお氣の毒で」

と中将が言うと源氏は笑つて、

「もう長くはいらっしゃらないだろう。誠意をこめてお仕えしておくがいい。内大臣はそんなふうでないと私へおこぼしになったことがある。華美なきらきらいことが好きで、親への孝行も人目を驚かすようにしたい人なのだね。情味を持ってどうしておあげしようというようなことのできない人なのだよ。複雑な性格で、非常な聡明^{そうめい}さで末世の大臣に過ぎた力量のある人だがね。まあそう言えばだれにだって欠点はあるからね」

などと源氏は言うのであった。

「あの大風^{ちゆうふう}に中宮付きの役人は皆出て来ていたか、昨夜^{ゆうべ}のことが不安だ」

と言って、源氏は中将を見舞いに出すのであった。

昨晚の風のきついころはどうしておいになりましたか。私は少しそのころから身体^{からだ}の調子がよろしゅうございませんでただ今はまだ伺われません。

という挨拶^{あいさつ}を持たせてやったのである。そこを立ち廊の戸を通して中宮の町へ出て行く若い中将の朝の姿が美しかった。東の対の南側の縁に立つて、中央の寢殿を見ると、格子が二間ほどだけ上げられて、まだほのかな朝ぼらけに御簾^{みす}を巻き上げて女房たちが出ていた。高欄によりかかって庭を見ているのは若い女房ばかりであった。打ち解けた姿でこうしたふうに出ていたりすることはよろしくなくても、これは皆きれいにいろいろ

ろな上着に裳^もまでつけて、重なるようにしてすわりながらおおぜいで出ているので感じのよいことであつた。中宮は童女を庭へおろして虫籠^{むしかご}に露を入れさせておいでになるのである。紫^{しおん}※色、撫子色^{なでしこ}などの濃い色、淡い色の^{あこめ}襦^{あこめ}に、女郎花色^{おみなえし}の薄物の上着などの時節に合つた物を着て、四、五人くらいずつ一かたまりになつてあなたこなたの草むらへいろいろな籠を持って行き歩いていて、折れた撫子の哀れな枝なども取つて来る。霧の中にそれらが見えるのである。お座敷の中を^{すまい}通つて吹いて来る風は侍従香の匂^{にお}いを含んでいた。貴女^{きじよ}の世界の心憎さが豊かに覚えられるお住居^{すまい}である。驚かすような気がして中將は出にくかつたが、静かな音をたてて歩いて行くと、女房たちはきわだつて驚いたふうも見せずに皆座敷の中へはいつてしまった。宮の御入内^{ごじゆだい}の時に童形^{どうぎやう}で供奉^{ぐぶ}して以来知り合いの女房が多くて中將には親しみのある場所でもあつた。源氏の挨拶^{あいさつ}を申し上げてから、宰相の君、内侍^{ないし}などもいるのを知つて中將はしばらく話していた。ここにはまたすべての所^{きゆう}よりも気高^{けだか}い空氣があつた。そうした清い気分の中で女房たちと語りながらも中將は昨日^{きのう}以来の悩ましさを忘れることができなかった。

歸つて来ると南御殿は格子が皆上げられてあつて、夫人は昨夜^{ゆうべ}気^きにかけながら寝た草花が所在も知れぬように乱れてしまったのをながめている時であつた。中將は階段の所

へ行つて、中宮のお返辞を報じた。

荒い風もお防ぎくださいますでしょうと若々しく頼みにさせていただったのでございますから、お見舞いをいただきましてはじめて安心いたしました。

というのである。

「弱々しい宮様なのだからね、そうだったろうね。女はだれも皆こわくてたまるまいという気のした夜だったからね、実際不親切に思召しただろう」

と言つて、源氏はすぐに御訪問をすることにした。直衣^{のうし}などを着るために向こうの室の御簾^{みす}を引き上げて源氏がいる時に、短い几帳^{きちよう}を近くへ寄せて立てた人の袖口^{そでぐち}の見たのを、女王^{によう}であろうと思うと胸が湧^わき上がるような音をたてた。困ったことであると思つて中将はわざと外のほうをながめていた。源氏は鏡に向かいながら小声で夫人に言う、

「中将の朝の姿はきれいじゃありませんか、まだ小さいのだが洗練されても見えるように思ふのは親だからかしら」

鏡にある自分の顔はしかも最高の優越した美を持つものであると源氏は自信していた。身なりを整えるのに苦心をしたあとで、

「中宮にお目にかかる時はいつも晴れがましい気がする。なんらの見識を表へ出しておいでになるのでないが、前へ出る者は気がつかわれる。おおように女らしくて、そして高い批評眼が備わっているというようなかただ」

こう言いながら源氏は御簾から出ようとしたが、中將が一方を見つめて源氏の来ることも気のつかぬふうであるのを、鋭敏な神経を持つ源氏はそれをどう見たか引き返して来て夫人に、

「昨日風の紛れに中將はあなたを見たのじゃないだろうか。戸があいていたでしょう」
と言うと女王は顔を赤くして、

「そんなこと。渡殿わたどののほうには人の足音がしませんでしたもの」
と言っていた。

「しかし、疑わしい」

源氏はこう独言ひとりごとを言いながら中宮の御殿のほうへ歩いて行つた。また供をして行つた中將は、源氏が御簾みすの中へはいつている間を、渡殿の戸口の、女房たちの集まっているけはいのうかがわれる所へ行つて、戯れを言ったりしながらも、新しい物思いのできた人は平生よりもめいっただふうをしていた。

そこからすぐに北へ通つて明石^{あかし}の君の町へ源氏は出たが、ここでははかばかしい家司^{けいし}風の者は来ていないで、下仕えの女中などが乱れた草の庭へ出て花の始末などをしていた。童女が感じのいい姿をして夫人の愛している童胆^{りんだう}や朝顔がほかの葉の中に混じってしまったのを選び出していたわっていた。物哀れな気持ちになつていて明石は十三絃^{げん}の琴を弾^ひきながら縁に近い所へ出ていたが、人払いの聲がしたので、平常着^{ふだんぎ}の上へ棹^{さし}からおろした小桂^{こけい}を掛けて出迎えた。こんな急な場合にも敬意を表することを忘れない所にこの人の性格が見えるのである。座敷の端にしばらくすわつて、風の見舞いだけを言つて、そのまま冷淡に帰つて行く源氏の態度を女は恨めしく思つた。

おほかたの萩^{はぎ}の葉過ぐる風の音もうき身一つに沁^しむこちして

こんなことを口ずさんでいた。

源氏が東の町の西の対へ行つた時は、夜の風が恐ろしくて明け方まで眠れなくて、やっと睡眠したあとの寝過ごしをした玉鬢^{たまかすら}が鏡を見ている時であつた。たいそうに先払い^{びようふ}の声を出さないようにと源氏は注意して、そつと座敷へはいった。屏風なども皆

畳んであつて混雑した室内へはなやかな秋の日ざしがはいった所に、あざやかな美貌の玉鬢たまかすらがすわっていた。源氏は近い所へ席を定めた。荒い野分の風もここでは恋を告げる方便に使われるのであつた。

「そんなふうなことを言つて、私をお困らせになりますから、私はあの風に吹かれて行つてしまいたく思いました」

と機嫌きげんをそこねて玉鬢が言つと源氏はおもしろそうに笑つた。

「風に吹かれてどこへでも行つてしまおうというのは少し軽々しいことですな。しかしどこか吹かれて行きたい目的の所があるでしょう。あなたも自我を現わすようになつて、私を愛しないことも明らかにするようになりましたね。もつともですよ」

と源氏が言つと、玉鬢は思つたままを誤解されやすい言葉で言つたものであると自身ながらおかしくなつて笑つてゐる顔の色がはなやかに見えた。海酸漿うみほおずきのようにふつくらとしていて、髪の間から見える膚の色がきれいである。目があまりに大きいことだけはそれほど品のよいものでなかつた。そのほかには少しの欠点もない。中將は父の源氏がゆつくりと話してゐる間に、この異腹の姉の顔を一度のぞいて知りたいとは平生から願つてゐることであつたから、隅すみの部屋へやの御簾みすが几帳きちようも添えられてあるが、乱れたまま

になつてゐる、その端をそつと上げて見ると、中央の部屋との間に障害になるような物は皆片づけられてあつたからよく見えた。戯れていることは見ていてわかることであつたから、不思議な行為である。親子であつても懐ふところに抱きかかえる幼年者でもない、あんなにしてよいわけのものでないのにと目がとまつた。源氏に見つけられないかと恐ろしいのであつたが、好奇心がつつてなおのぞいてみると、柱のほうへ身体からだを少し隠すように姫君がしているのを、源氏は自身のほうへ引き寄せていた。髪かみの波が寄つて、はらはらとこぼれかかつていた。女も困つたようなふうはしながらも、さすがに柔らかに寄りかかつてゐるのを見ると、始終このなれなれしい場面の演ぜられていることも中将に合点がてんされた。悪感おかんの覚えられることである、どういふわけであらう、好色なお心であるから、小さい時から手もとで育たなかつた娘にはああした心も起るのであらう、道理でもあるがあさましいと真相を知らない中将にこう思われている源氏は氣の毒である。玉鬘は兄弟であつても同腹でない、母が違ふと思えば心の動くこともあるうと思われる美貌であることを中将は知つた。昨日見た女王にやおうよりは劣つて見えるが、見ている者が微笑ほほえまれるようなはなやかさは同じほどもに思われた。八重の山吹やまぶきの咲き乱れた盛りに露を帯びて夕映ゆうばえのもとにあつたことを、その人を見ていて中将は思い出した。このごろの

季節のものではないが、やはりその花に最もよく似た人であると思われた。花は美しくても花であつて、またよく乱れた蕊しべなども盛りの花といつしよにあつたりなどするものであるが、人の美貌はそんなものではないのである。だれも女房がそばへ出て来ない間、親しいふうに二人の男女は語っていたが、どうしたのかまじめな顔をして源氏が立ち上がった。玉鬘が、

吹き乱る風のけしきに女郎花をみなへししを萎れしぬべきこちこそすれ

と言つた。これはその人の言うのが中将に聞こえたのではなくて、源氏が口にした時に知つたのである。不快なことがまた好奇心を引きもして、もう少し見きわめたいと中将は思ったが、近くにいたことを見られまいとしてそこから退のいていた。源氏が、

「しら露に靡なびかましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし

弱竹なよたけをお手本になさい」

と言つたと思つたのは、中将の僻耳ひがみみであつたかもしれぬが、それも気持ちの悪い会話だとその人は聞いたのであつた。

花散里はなぢりの所へそこからすぐに源氏は行つた。今朝けさの肌寒はださに促されたように、年を取つた女房たちが裁ち物などを夫人の座敷でしていた。細櫃ほそびつの上で真綿をひろげている若い女房もあつた。きれいに染め上がった朽ち葉色の薄物、淡紫うすむらさきのでき上がりのよい打ち絹などが散らかっている。

「なんですこれは、中将の下襲したかたはなんですか。御所の壺前裁つぼせんざいの秋草の宴なども今年はだめになるでしょうね。こんなに風が吹き出してしまつてはね、見ることも何もできるものでないから。ひどい秋ですね」

などと言いながら、何になるのかさまざまの染め物織り物の美しい色が集まつているのを見て、こうした見立ての巧みなことは南の女王にも劣つていない人であると源氏は花散里を思つた。源氏の直衣のうしの材料の支那しなの紋綾もんあやを初秋の草花から摘んで作つた染料で手染めに染め上げたのが非常によい色であつた。

「これは中将に着せたらいい色ですね。若い人には似合うでしょう」

こんなことも言つて源氏は歸つて行つた。

めんどう

面倒な夫人たちの訪問の供を皆してまわって、時のたったことで中将は気が気でなく思いながら妹の姫君の所へ行った。

「まだ御寢室にいらっしゃるのでございますよ。風をおこわがりになって、今朝はもうお起きになることもおできにならないのでございます」

と、乳母が話した。

「悪い天気でしたからね。こちらで宿直をしてあげたかったのだが、宮様が心細がつていらっしゃったものですからあちらへ行ってしまったのです。お雛様の御殿はほんとうにたいへんだったでしょう」

女房たちは笑って言う、

「扇の風でもたいへんなのでございますからね。それにあの風でございましょう。私どもはどんなに困ったことでしよう」

「何でもない紙がありませんか。それからあなたがたがお使いになる硯を拝借しましう」

と中将が言ったので女房は棚の上から出して紙を一巻き蓋に入れて硯といっしょに出してくれた。

「これはあまりよすぎて私の役にはたちにくい」

と言いながらも、中將は姫君の生母が明石夫人であることを思つて、遠慮をしすぎる自分を苦笑しながら書いた。それは淡紫の薄様うすようであつた。丁寧に墨をすつて、筆の先をながめながら考えて書いている中將の様子は艶えんであつた。しかしその手紙は若い女房を羨望せんぼうさせる一女性にあてて書かれるものであつた。

風騒ぎむら雲迷ふ夕べにも忘るるまなく忘れぬ君

という歌の書かれた手紙を、穂の乱れた刈萱かるかやに中將はつけていた。女房が、
「交野かたのの少將は紙の色と同じ色の花を使ったそうでございますよ」

と言つた。

「そんな風流が私にはできないのですからね。送つてやる人だつてまたそんなものなのですからね」

中將はこうした女房にもあまりなれなくさせない溝みぞを作つて話していた。品のよい貴公子らしい行為である。中將はもう一通書いてから右馬助うまのすけを呼んで渡すと、美しい

童侍わらわや、ものなれた随身の男へさらに右馬助は渡して使いは出て行った。若い女房たちは使いの行く先と手紙の内容とを知りたがつていた。姫君がこちらへ来ると言つて、女房たちがにわかに立ち騒いで、几帳きちようの切れを引き直したりなどしていた。昨日から今朝にかけて見た麗人たちと比べて見ようとする氣になつて、平生はあまり興味を持たないことであつたが、妻戸みすの御簾みすへ身体からだを半分入れて几帳きちようの綻ほころびからのぞいた時に、姫君がこの座敷へはいつて来るのを見た。女房が前を往ゆき来するので正確には見えない。淡紫の着物を着て、髪はまだ着物の裾すそには達せず、末のほうがわざとひろげたようになつて、いる細い小さい姿が可憐かれんに思われた。一昨年ごろまでは稀まれに顔も見たのであるが、そのころよりはまたずっと美しくなつたようであると中将は思った。まして妙齡になつたらどれほどの美人になるであらうと思われた。さきに中将の見た麗人の二人を桜と山吹にたとえるなら、これは藤ふじの花といつてよいようである。高い木にかかつて咲いた藤が風になびく美しさはこんなものであると思われた。こうした人たちを見たいだけ見て暮らしたい、継母であり、異母姉妹であれば、そののできないのがかえつて不自然なわけであるが、事実はそうした恨めしいものになつていと思うと、まじめなこの人も魂がどこかへあこがれて行つてしまふ氣がした。

三条の宮へ行くと宮は静かに仏勤めをしておいでになった。若い美しい女房はここにもいるが、身なりも取りなしも盛りの家の夫人たちに使われている人たちに比べると見劣りがされた。顔だちのよい尼女房の墨染めを着たのなどはかえってこうした場所にふさわしい気がして感じよく思われた。内大臣も宮を御訪問に来て、灯^ひなどをもしてゆつくりと宮は話しておいでになった。

「姫君に長く逢^あいませぬね。ほんとうにどうしたことだろう」

とお言い出しになって、宮はお泣きになった。

「近いうちにお伺わせいたします。自身から物思いをする人になって、衰れに衰えております。女の子というものは実際持たなくていいものですね。何につけかにつけ親の苦労の絶えないものです」

内大臣はまだあの古い過失について許し切っていないように言うのを、宮は悲しくお思いになって、望んでおいでになることは口へお出しになれなかった。話の続きに大臣は、

「ものにならない娘が一人出て来まして困っております」
と母宮に訴えた。

「どうしてでしょう。娘という名がある以上おとなしくないわけではないものですが」
「それがそういかないのです。醜態でございます。お笑いぐさにお目にかきたいほどうす」

と大臣は言っていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
